

## ヤスパース哲学における

### 「交わり」の意義

村 上 聖 子

「交わり」 Kommunikation の思想はヤスパース哲学の根本思想の一つである。必ずしも特殊な概念ではない。概略的に言えば、交わりは一般的な人間相互の交渉であり、更には互いの自己実現を促す深い結びつきともなるものである。いわば私達は交わりの中で生きているともいえるわけである。さて、このような人間的な交わりがヤスパース哲学においてどのような意義をもっているのだろうか。この問題をまずヤスパース自身の伝記的背景から考察し（Ⅰ）次に交わりをいかなるものとして開明しているかという視点から論じていきたい。その際、孤独と交わりとの関係、及び、「愛の闘争」という交わりの性格を重視することになるだろう（Ⅱ）。

#### Ⅰ

ヤスパースは交わりという哲学の出発点を次のように言い換えている。「人間が人間に対して、単独者として単独者に対して、いかに立ち振るまうかということが私達の出

発点となる」と。彼は人間的な交わりの中から哲学する Philosophieren 態度を言明するのである。そして、その具体的な内容の全ては自分の身近な人々に負うているとしている。その意味は常識的に次のように考えていいかと思う。人間が一個の人間として形成されるのは、ただ自身力だけに基づくのではない。必ず自己を形成させてくれるところの外部の原因というものがある。その原因の中で最も直接性を帯びるのは、自分の家族、先生、先輩、友人、仲間といった具体的で身近な人間関係であり、そこに成立する出会いである。ヤスパースの場合も、その出会いの中で哲学する態度が形成されたものと考えられる。さて、ヤスパースに限らず、哲学的思想とその思想を生み出した人間との相関関係を知ることが、哲学研究の基本的な操作である。しかし、そのような理由だけからではなしに、私は彼の人間性を明らかにしておきたいと思う。なぜなら、彼の内奥を強く揺るがした経験を知った時、私は彼の哲学

に一步近づけたように感じたからである。「私の追憶しうる限りでは、私の心を強く動かした経験は、他人とお互いに了解し合ったり、了解し合えなかった時のそれである」と語るヤスパースにとつて、この種の感動は哲学することの根源であり、なぜ交わりが彼の根本思想となるのかを知る手掛かりとなるはずである。

(1)

人間が有限であること、また人間が徹底して他者に依存しているということを、普段私達は本質的には自覚していない。ヤスパースがこのことの自覚を余儀なくされた主要要因は、病気による例外的条件下での生活であろう。彼は赤ん坊の時以来体質的に虚弱で、慢性的な病氣（気管支拡張症）に苦しめられていた。これは不治の病とされ、彼は恵まれた生活環境を整えることに自分の生の大部分を費やさなければならなかった。にもかかわらず、彼が必ずしも社会的な生活から隔離されたとは思えないような経歴をもっているのは、彼が一貫して病気を自分の人生に組み入れていたことによる。彼は病気が自分の現実生活と切り離せないものとなり、のり越えることのできない限界として自覚された時、病気を引き受ける *aufnehmen* ことを課題としたのである。即ち、この限界をもちつつ、糊塗することなしに自己を見出すということ、病気を引き受けることができるための根源としたのである。従つて、彼は病人として両親のもとに引きこもつて生活するのではなく、

「人間としての尊厳」に基づく生き方を目指す。彼は病気をかかえながらも人々の間に入って行き、世間に登場する生き方を決断するのである。

とはいえ、若いヤスパースは病気による身体的無能感、将来への絶望感との闘いから解放されていたわけではない。彼は自分を「いじけた発育をしている植物」に喩えるなどして、自ら社会の成員として一つの職業を自分のものとする可能性に悲観的である。あるいは日記の中で次のような自己反省もしている。「私には病人としての私を健全な世界と対立させようとする強い傾向があるし、病的なものこそ私にとつての原理だと考え、それを同様に肯定されうる特別な違つた人生と見ようとする強力な傾向がある。こんな状態を何と呼ぶべきだろうか。――悪魔を演ずることでも言うべきだろうか」。以上のような懸念を抱きながらも、人生に対する彼の態度は、既に哲学することの基調を有している。それは頼りない自分の現存在の自覚から、この世界での行動の足場を求めていく態度である。彼は個人としてかかえる事情を引き受けながら世界の秩序の中へと入り込み、何か仕事をし自ら飛躍する課題に立ち向かう態度を確証することになるのである。

(2)

一方で病気を引き受ける生き方を課題としながら、ヤスパースの孤独は深い。愛する両親のもとで保護され、親しい友人があつたにもかかわらず、彼は孤独だと感じる意味

を問い求めるのである。何とも規定しがたい憧れが彼の心をつかむ。けれど、何に対する憧れなのか、自分は本当に何を欲しているのかわからない彼の心情が、次のように吐露されるのである。「私は死んだ人間だ。多くの人々にとって私は堪え難いものである。何らかの友との魂の一致はもはやなく、女性への愛もなく、何かを生み出す力もない。―私には今なお生きる目的があるのか。…何をしたらよいのか」この独白は前述の身体の弱さとの闘いからくるものであるが、ヤスパースの孤独のはたらく方向を示唆している。即ち、自分の現実の生活が他の人の保護に依存することになるだろうことを察知しながら、それでも彼は自分の内面に生き生きとした力を感じていた。あり、仮令自分の存在がこの世間では何ら実質的な利益を達成しえなくても、自分が正当に生存しうる何ものかだと感じていたのである。この存在への強い衝動（意志）が、限界に近い状態で、彼に他の人間との根源的な交渉を求めさせる。それは挫折と不満の連続の試みであった。

しかし、彼が現実の相互生活の中で、常に充ち足りぬ自己を感じながら憧れ続けた何かが明らかとなり、彼にいわば哲学的確信を与えることになる運命的な出会いがなされる。そのことについて、彼は晩年次のように談話している。「ものごとの根拠には、そのために生きるに値するものか、それによって人生がすばらしい現実となることのできるような何か、いずれにしろ実際にあるのであるが、

人間、その本質は人間的に可能なことを実現することだと思われる人間こそ、右の事態を保証するものであることがわかった。私は顧慮するところなき友情で結ばれるような友を求め、また私が永遠の昔から互いに帰属し合っているかのように愛せる人を求めたし、またあらゆる制限を突破してゆく、充実された挫折の運命を担った人だと、感動的な驚愕をもってみなしうるような人物を探した。これらの人を探し求めて、私は三人の人、即ち無二の親友エルンスト・マイヤー、妻ゲルトルート、及び師マックス・ヴェーバーに出会った。彼らとの結びつきがヤスパース哲学の内容に大きく関わっていることは言うまでもない。それは、いわゆる「実存的交わり」の地盤となっている。

そこで、中でもエルンスト・マイヤーとの交友を重視しよう。ヤスパース最初の哲学的大著『哲学』の執筆に際し、彼はエルンストと一緒に仕事をし、そこでの着想及び構成の助言も受けたとの叙述を借しまない。エルンストはヤスパースの問題を徹頭徹尾自分自身の問題として取り扱う態度で思索した。彼らの友情はお互いを承認しながら絶えず攻撃し合い、あらゆることについて論争する交友によって育まれたものである。その連帯性は「愛の闘争」という実存的交わりの性格をもっていたと想像される。ヤスパースはそれまでの多くの交際においては見いだされなかったもの、即ち自分本来のあり方が思い知らされるのを覚えるのだった。省みるに、交わりへの不満は彼にとって不可解な

苦痛の経験であった。それは、完全に共通の事柄の中での熱情的な相互関係においてさえも起こった。しかし、今やそのような孤独と待機が彼を本来的な交わりへと導いたといえよう。人間性の深みにおいて、即ち人が自らありうるところのものにおいて、相互に自己自身に到達し合いうるような相互生活こそ本来的であると彼は確信するのである。それ故、二人の共同思索が結実した『哲学』には、ヤスパースの孤独の体験と誠実な人間探究による交わりの体験が、いわば実質として息づいているのである。

## II

かくてヤスパースは、常に理性と人間的交わりを強く欲していた彼の人間の本質から、哲学の本来的伝承を試みる。つまり、ヤスパースにとって哲学の課題は「真の交わり」の開明なのである。即ち、交わりが決定的な根源であり、交わりを本来的なものとして欲求する思惟が、哲学することととしての本質的な方法となる。そこで、いわゆる実存的交わりの開明を次に噛み砕いていこう。

一般に人は無意識のうちに他者を判断し、感情によって好き嫌いの味をつけ、経験によって自分の理解できない点は鵜呑みにしてしまう。それはたまにしか会わない友人や、自分の外側だけでつき合えばいい同僚、その他の便宜的な関係において特に顕著であるし、生活の大部分を共にしてきた家族についてさえそういう傾向がある。その中で相互理解の問題が重要になるのは、いわゆる愛に関わる特殊な

相互関係においてであろう。そこにおいて初めて私達は自己の独自性を孤独として意識するのではないだろうか。ここにヤスパースは、「私自身であるということは孤独である」ということを承認できる判明な意識をまず要請する。これは例外者意識というより、自己の単独性の意識としての孤独であるから、人間が生まれながらもっている彼固有の世界の本質である。

けれど、孤独であるからといって、それだけでは自分自身ではない。ヤスパースは、自己閉鎖的な孤独をより積極的に解放的なものに引き上げようとする。その孤独は外界との関係を見抜きながら、己の内なる世界を発展するもの、流動するものとして把えることで自己を生成する。その時、自ずと孤独は交わりに入るけれど、孤独からの脱出として他者が求められるのではないから、そこには孤独と交わりとの緊張関係が存することになる。

孤独と交わりとの緊張関係は、自己を濫費すまいとする心情を保持しながら、常にそれを突破する過程のうちにある。ヤスパースはこの自己を濫費すまいとする心情を「孤独の威信」 *Würde* と呼び、理性存在 *Vernunftwesen* としての人間の信頼性に存するものとしている。即ち、盲目的、気ままに自己の孤独を廃棄することによって交わりに入るのではない。「私がもし私の根源から敢えて自己自身であろうとし、それ故に敢えて最も深い交わりに踏み入ろうとすれば、私は孤独を欲せねばならない」。孤独の威信

は常に覚悟を怠らず、反省的で幻滅をものもしない。他方、この威信の中には征服できない人間に対する疎隔欲や頑固な孤立欲もある。それは、単に現存するにすぎない交わりにおいて沈黙に安んじようとする。従って、二義的な孤独の威信はどちらにしろ、人と距離を置くこと、自分の決意を曲げないことなどについて配慮するのだから、開顕されることを制約とする実存的交わりにとっては対極<sup>二</sup>といえる。にもかかわらず、このような威信が開顕することにおいて、即ち一切のへかくあること<sup>一</sup>を敢えて放棄することに於いて、可能的実存としての自己が獲得され、一層深い独立性としての孤独が出現する。かくて、「孤独は、それなくしては交わりそのものが存在しないところの、交わりにおける廃棄せられない極」としての意義をもつ。そのような独立性こそ哲学する人が獲得しなければならぬものであり、「交わりへの不満」として経験されるものの意味なのである。そして、開顕される過程のうちに、いわば研ぎすまされる孤独と孤独とが自己獲得のためにぶつかり合う場が、「愛の闘争」の場である。

孤独から相互に出会った可能的実存は、本質的に真なるものをいわば一挙に把えることはできない。「人間とその世界とは瞬間に成熟するものではなく、いろいろな状況の系列を通じて獲得される」のである。実存的な連帯性は現象過程の中へ踏み入らなければならない。即ち、一時的で、中途半端で、不完全な立場を通らなければならないし、飛

び越えるためには極限まで昇りつめた立場を通らねばならないわけである。従って、現象における徹底的挫折も経験されることになる。しかし、実存的交わりは自己の開顕のために闘い続ける。

「闘いとしてのこの交わりは、自己の実存のための闘いと、他の実存のための闘いとが一つであるところの、実存のための単独者の闘いである」<sup>一</sup>。ここでは、互いに忠告し、反省し、批判し、論難し合うという行動と表現が現実にとられる。相手の言葉を聞く場合、話し方のニュアンスからも真剣に答えなければならぬ。論理的な釈明に終止したり、安易に妥結点を見い出そうとすることは許されない。両者の知識、才能、記憶力、疲労度の差異にもかかわらず、全力を尽くすことが「水準の同質性」をつくり出す。闘争そのもののうちに既に承認があり、設問のうちに既に肯定がある。このように実存の真理獲得のためにお互いを見抜こうと徹底的に問い合う連帯性は、いわば魂の苦悩の上に結びつく友情ともいえよう。つまり、それは「愛」に支えられているものなのである。

ここで、愛が先か、闘争が先かという議論が生じるかもしれないが、ヤスパースのいう闘いながらの愛は次のように考察された。例えば、キリスト教的な愛は隣人愛（アガペー）を、ギリシア的な愛は愛知の欲望（エロス）を、近代の愛は博愛・人類愛を典型とするという形式化が許されるならば、ヤスパースの愛はそれら全てを包摂する愛であ

ると解釈される。根源的に愛が一であるならば、多様な形態は矛盾するものではない。故に、ヤスパースの愛については次のような叙述ができる。愛なき隣人愛は無差別な同情の自己享樂となる。また、愛なくしては美の観照は美的放縱となり、可能性は夢想となり、感性的な熱望は享樂的な愛欲となる。公明性を求める根源的な知識欲も、愛が逸脱すると空虚な思惟あるいは好奇心となる。以上のような根源的な愛は、実存と実存との関係の内に引き入れられる時、仮借ない誠実な闘いの交わりという形態をとるものである。それは存在を明察する。即ち、「実存の存在に先行する実体は単独者に対する理由なき愛である」けれど、「愛はまだ交わりではなく、交わりを通じて開明されるところの交わりの源泉である」。

かくて、愛につき動かされながらあらゆる外的ものを突破し、人間が彼自身として他の自己に向かつて立ち現われるための闘いは、運命の共同を実現させるだろう。ヤスパースは根源的なものを伝達するために、愛の闘争という交わりをもって、ほとんど全ての人間関係における相互理解を試みようとしている。「もはや一緒に祈ることさえできなくなっている今日に至って初めて、人間存在は人間相互の腹藏のない交わりに拘束されたものであるということが十分に意識されることになった」として、彼は人々を結びつける本来の現実態の達成を、実存的交わりの可能性に求めるのである。

以上、実存的交わりがいかなる活動であるかを述べてきた。真の交わりが哲学の課題であるならば、ヤスパースの哲学することは実行の極めて困難な交わりのうちに思惟の過程があることが知られたかと思う。そして、私達の固定した現実の意識は、実存的交わりは元々不可能なものではないかという疑念を払拭できないために、その可能性をも拒否したく思う。ヤスパースにしても、「彼は他者にとって、他者は彼にとって、根底において無縁であり、一つの謎である」という見解に対する反駁は、論理的には不可能であるとしている。また、そのような反駁に意義をみとめてもいない。現存的な意識が拒否する限り、交わりが必ずしも必然的な現実でないのは確かだからである。「彼は飽くまで彼自身であるし、私はどこまでも私自身であり、両者のどちらも他方のものに変化するのではなく、しかも各自が交わりのうちで真に自己になることを知ることによってこそ、まさに私は他者と交わりを実現するのである」。ヤスパースは、現実と共に生き共に語り合うという共同を通じて真理への道を見出し、その途上において初めて自己になるという可能性を信じる。限りなく交わりを進めようと決断する。それは、論証を哲学の本質的な方法とする客観主義の限界に、哲学することの根源を引き戻そうとするものであり、科学的な知とは本質的に異なったものとして哲学的真理を求めるものである。「もし人間と人間とが真の交わりのうちに立たないならば、哲学体系としてのいかな

る究極の真理もありえない。従って、実存的交わりの開明への努力は、哲学することにとって本質的に不可欠なのである。

〔参考文献〕

○ Jaspers, "Philosophie: II; Existenzzerhellung; § 3. Kommunikation"

○ ヤスパーズ

林田新二訳『運命と意志―自伝的作品』

(昭和55年3月卒業)